

宰府画報

第26号

2025年4月
(令和7年)

発行 市会課
宰府委員 財政
宰府文化 太教文

逸品探訪

長崎歴史文化博物館所蔵

江稼圃像

齋藤秋圃

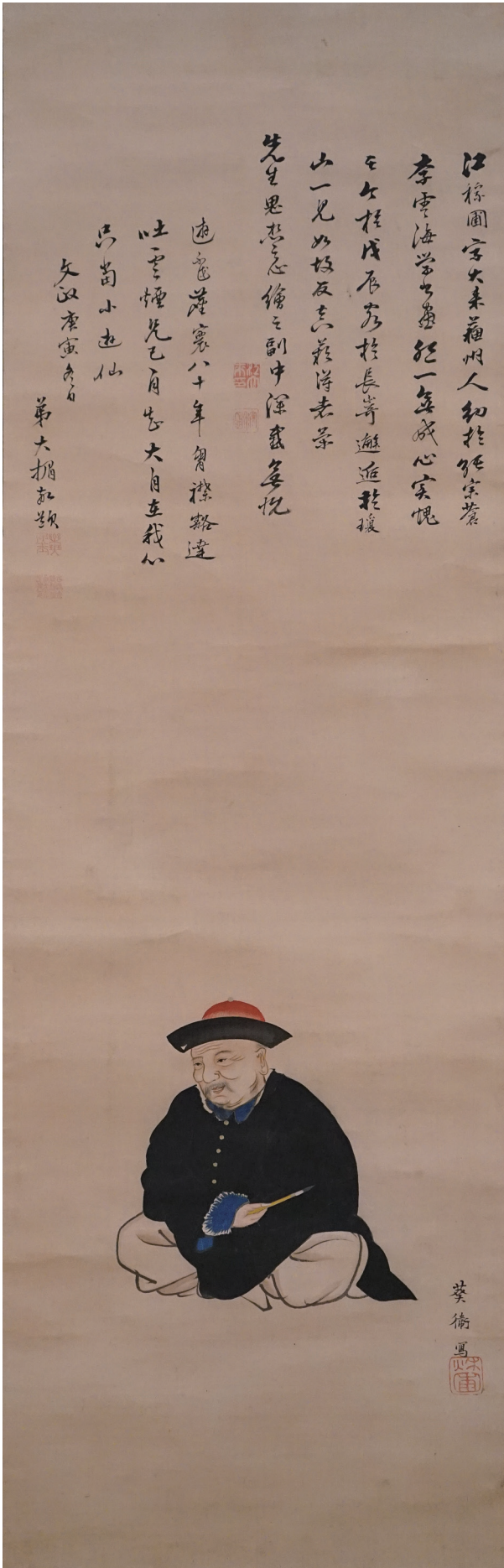
鎖国政策が行われていた江戸時代において、長崎は海外に開かれた窓口の一つであり、中国や西洋のさまざまな文物が行き交う国際都市でした。最先端の情報や知識、未知なる世界にふれようと、国内各地から長崎を目指した人も多くありました。

江稼圃（生没年不詳）は浙江省臨安（杭州）の人で名を大来といい、文化元年（1804）以降数度にわたって来日した人物です。絵画に長じ、長崎の画家をはじめ、当地を訪れた諸家と交流したことが知られています。齋藤秋圃のもとでの名である「葵衛」の署名がなされ

た本作品は、秋圃が長崎に赴き江稼圃の知己を得たことを示すものとして、つとに知られた逸品です。

賛文は二つに分かれていて、右は像主の江稼圃自身が書いたもの、左は稼圃の弟江芸閣によるものです。江稼圃の賛には、長崎で秋圃と出会ってすぐに旧友のような気持ちとなったといい、先生（秋圃）の絵には思想する心が添えられていると称えています。齋藤家資料には帰国を前にした江稼圃が別れを惜しんで秋圃に宛てた書簡や、弟江芸閣からの書簡が複数のこさされていて、本作が三者の親しい関係性から作られたことを窺わせます。

さて、秋圃作品についてはこれまで幾度か、軽妙でユーモラスな人物表現に魅力があると紹介してきましたが、この江稼圃像はそのイメージとはかなり異なる印象があります。顔やズボンの輪郭線には赤味のある線を添わせて立体感を表現したり、写真では黒一色に見える上着部分も、衣文線（えもんせん）を塗り残す彫塗（ほりぬり）の技法を用いたり、とても丁寧な表現がなされています。洒脱な人物を描く一方で、秋圃は本作のように細部までしっかりと描きこんだ肖像画を多く手がけていたことが、齋藤家資料などから明らかになってきています。（井形栄子）



絹本着色 掛幅装 111.0 × 35.9cm 江稼圃、江芸閣賛
江戸時代後期（文政13年〔1830〕 江芸閣着賛）

調査見聞

寄贈資料紹介

箱崎清水家の絵師・文人資料

始まりは一本の電話から

令和5年のとある日、吉嗣^{よしつぐ}拝山^{はいさん}の作品をお持ちだという箱崎にお住まいの方から一本の電話をいただきました。詳しくお聞きすると、明治・大正時代に太宰府町長や町議員を務めた中村久吉という人物の子孫にあたる方で、家にある吉嗣家や萱島^{かやしま}家の作品を寄贈したいということでした。

早速お宅に訪問し作品を拝見させていただくと、吉嗣家三代^{ごせいさんだい}（梅仙^{ばいせん}・拝山^{はいさん}・鼓山^{こさん}）だけでなく萱島秀山^{しゅうざん}・秀峰^{しゅうほう}、拝山の門人である藤瀬冠村^{ふせかんむら}が書いた掛軸、扁額、屏風、衝立など、太宰府の絵師・文人に関連する作品が17点確認でき、市で寄贈受入することとなりました。

中村家と清水家

なぜ箱崎にお住まいの家と太宰府の絵師が関係しているのか。お宅と吉嗣家との関係を伺うと、所有者の祖母クニは中村久吉の娘にあたり、箱崎の清水家に嫁入りしたということでした。

中村家は現在の太宰府天満宮幼稚園あたりに家を構えており、吉嗣家の住居兼アトリエである「古香書屋」もすぐ近くだったこともあり、吉嗣家のお庭で遊ぶこともあったくらい親交があったようです。

クニは大正2年（1913）に箱崎で染織工場を営む清水敬一郎^{しんけいいちろう}のもとに嫁ぎます。清水家は箱崎で染織業を営んでおり、足踏機械を導入した本格的な

木綿^{もめん}縞^{じま}を生産していました。箱崎で生産される木綿縞は箱崎縞^{はこざきじま}と呼ばれていたようですが、現在は現物がほとんど残っていない幻の織物となっています。久吉はクニの嫁入り後、度々清水家を訪れていたようで、家に伝わる作品はそうした折に久吉から清水家に贈られたものと推測されます。

中村^{なかに}磯^{いそ}瀨^のの正体

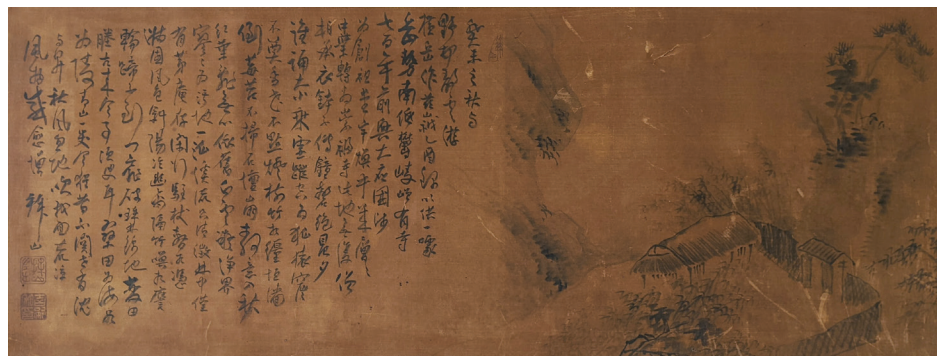
資料の中には昭和2年（1927）に住居を新築した敬一郎へのお祝いに二つの扁額が贈られています。その内一つには裏面に「昭和二丁卯初春清水敬一郎氏／新築成爲祝贈会所宛拝山／□伯横岳之作為念書之／磯瀨老人」と記されており、磯瀨と名乗る老人が吉嗣拝山の作品を贈っています。

磯瀨という人物は『吉嗣家資料【書画編】』所収の《諸画貼交屏風》（合作No.55）で書を寄せています。明治23年（1890）に拝山が大和月瀬^{やまとつきがせ}（奈良市月ヶ瀬）へ観梅の旅に出る際には中村磯瀨が送別詩を贈ったという新聞記事もあり、磯瀨が中村姓だと分かります。さらに、中村久吉の家に伝わる『中村家文書』（太宰府市公文書館目録）には磯瀨による詩があることから、中村磯瀨は中村家の人物の可能性が高く、もしかすると久吉本人の雅号ということも考えられます。

今回のように家同士の繋がりを knowing ことで地域の歴史がまた一つ明らかに なりました。清水家で大切に伝わってきた作品は太宰府に里帰りし、今後は展示や研究に活用される予定です。



吉嗣鼓山《墨竹図》
紙本墨画 掛幅 149.5 × 47.3
cm 清水敬一郎所蔵資料



吉嗣拝山《山水図》 絹本墨画墨書 扁額 32.5 × 90.8cm 明治16年（1883）
清水敬一郎所蔵資料

（木村純也）

いちまい

賞 鑑 稿 画

齋藤家資料

馬曳図（柳陰洗馬図）

柳の木が生える土手の傍で、川の浅瀬に足首までつかり、両手で馬の銜を取って立つ男性が側面観で描かれています。男性の身体や衣服の輪郭や柳の枝葉、川の水波を淡墨線で描き、馬は体軀を濃淡のある墨面で、顎から前足にかけての輪郭や尻尾を乾筆の墨線で描いています。男性の頭巾と水波にのみ青色を淡く塗っています。



紙本墨画淡彩 39.0 × 52.4cm

本作品の男性は、髪を結って頭巾でくるみ、上衣とズボンをはく中国の服制です。本作品には、頭部が大きい来種風の馬と、身近な植物である柳が描かれているため、日本の日常生活の一コマを切り取ったかのような感じがしますが、清流で馬を洗うという中国伝統の画題「洗馬図」の伝統を汲むものでしょう。

江戸時代以降、多くの画家が「（柳陰）洗馬図」を描いています。線描や色彩の軽妙さに加え、馬と人

目を合わせる構図によって生み出される和やかな情感は、本作品の際立った魅力といえます。

【参考文献】

金井紫雲編『復刻東洋画題総覧』平成9年、国書刊行会

馬は家畜の中で最も重要で、芸術の題材として長い歴史をもっています。日本絵画史では、宇多法皇の御所に平安前期を代表する画家・巨勢金岡の描いた馬が、夜な夜な絵から抜け出して近辺の田を食べて困ったため絵の馬の目をほりくじいたという伝説が『古今著聞集』にあります。

メイショ
メイブツ

続・衣掛天満宮の扁額

本紙第7号（2021年7月）のこのコーナー「衣掛天満宮の扁額」の記事を皆さん覚えていらっしゃるでしょうか。水城跡近くに鎮座する衣掛天満宮の由緒とともに、拝殿内の扁額が昭和28年（1953）に枯れた裏山の御神木を用いたものであることを紹介する記事でした。

今回ご紹介する扁額は、その衣掛天満宮から至近距離にあった旧家に伝わった

もので、同じ御神木の松から作られたという由緒をもつものです。表面には吉嗣鼓山による堂々とした松の図と漢詩があり、裏面には「空高く聳えし宮の千歳松虫に斃れてさびしかりけり」という歌とともに長文の由緒書きがあります。文章の前半は御神木の歴史に関わるものですが、後半部にはこの扁額ならではの由緒が綴られています。これによると、この扁額は松島元という人物が、倒れた後に払い下げられた御神木の一部を譲り受けたものといい、鼓山先生に作画を依頼したというのです。昭和28年10月29日、松島氏の住宅上棟式1周年となる記念日にこの由緒を記したといい、この扁額が新居を飾ったことが窺えます。

時を経て令和に至り、この住宅も既にありませんが、御神木と松島家の波乱万丈の記憶を留める扁額は、いま絵師調査室の一角に安住の地を得ています。



上：鼓山の松図賛 下：松島元の由緒書き

（井形栄子）

関係者
名鑑

Vol.6

かいえだのぶよし
海江田信義

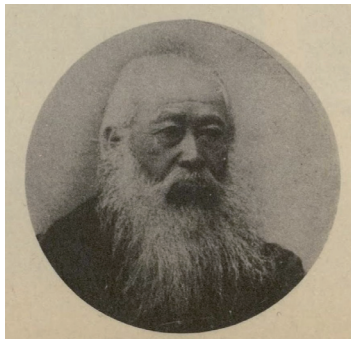
生没年 天保3〜明治39 (1832〜1906)
関係者 吉嗣家

プロフィール

幕末の薩摩藩士。尊攘派。西郷隆盛、大久保利通らと精忠組を結成。寺田屋騒動、生麦事件（英人リチャードソンに止めを刺したと言う）にも関わる。薩英戦争従軍。戊辰戦争で東海道先鋒総督参謀。明治期には奈良県知事、元老院議員、貴族院議員、枢密顧問官など。享年75歳。

「冬さむミ／ねさめのとこに／火吹竹／猛きこの身は／むかしなり／けり」

初めにお詫びと訂正。『吉嗣家資料』書画編』No.119（89ページ）では第2句「ねさめとこに」となっていますが、「の」が抜けていました。申し訳ありません。「冬さむミ」は「冬寒いので」。「火吹竹」は絵を見てわかるように、この場



海江田信義肖像
出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)



《火吹き翁図》 紙本墨画 44.3 × 76.4cm 吉嗣家資料

合キセルを戯れて言っているのでしょう。同時に和歌技巧として「ひふきたけ／たけき」と続け、「猛き」を導く序詞となっています。彼の経歴を見ると「猛きこの身」と詠むのもうなずけます。火鉢にかじりついてぬくぬくと寝覚めの一服と言ったところでしょいか。若く元気だった頃を思い出しつつ、「昔はこんなことはなかったのに」と我が身の老いを苦笑いしています。

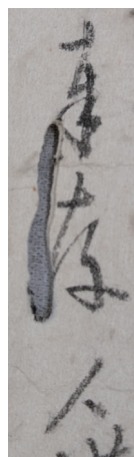
（赤塚睦男）

ひとこと
くずし字

【奉存候】

手紙やメールで何度も使ってしまう「〜と思います」という表現。昔の人も良く使っていたようで、くずし字の頻出語句として挙げられます。

「奉存候」は「存じ 奉り 候」と読み、「存じ候」で「思います」という意味になり、そこに謙譲語である「奉」がつくことで、相手に対して地位が下位のものが上位の者に送る書状などで見かける表現となります。

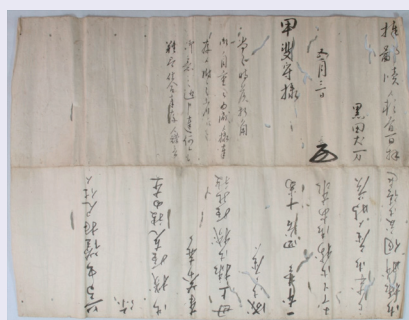


文字を見ると「奉」は横棒が省略され、「存」はほぼ原形を留めますが、「候」は漢字の「人」のように書かれています。この文書は黒田犬万が甲斐守に宛てたもの。「犬万」は秋月藩主（初代長興・9代長韶）の幼名で、甲斐守は藩主が名乗った官名です。これらの情報と、齋藤秋圃が仕えた時代を勘案すると、黒田犬万は9代藩主の黒田長韶、甲斐守は8代藩主で齋藤秋圃を秋月藩にスカウトした黒田長舒でしょうか。子から父へ、近況を記した手紙になり

ますが、何故齋藤家に伝わっているのか、伝来の経緯は不明です。

これは折紙という古文書様式の一つで、一枚の紙を半分に折って、折り目に向かって文字を書くため開くと文字が対称になります。犬万の力強い花押が見られる、齋藤家資料としては珍しい武家文書になります。（木村純也）

この資料



〔書状〕 39.4 × 53.0cm 齋藤家資料

編集後記

既存の情報と、調査により判明した事実。これら結びつけて新たな事実や可能性を検討するのが調査の醍醐味です。（木）

大坂の遊里で幫間をしていた秋圃。舞台は違えど大河ドラマで吉原の幫間や絵師が登場すると妙にワクワクしています。（井）